様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月　１０日現在

機関番号：15301
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2009～2012
課題番号：21730552
研究課題名（和文）
身体化の心理療法におけるイメージの有効性に関する研究
研究課題名（英文）　Research on effectiveness of imagery in psychotherapy for somatization

研究代表者
桑原　晴子（KUWABARA HARUKO）
岡山大学・大学院教育学研究科・講師
研究者番号：70434769

研究成果の概要（和文）：本研究は、身体化としての乳がんの心理療法におけるイメージの有効性について検討を行うものである。バウムテストを用いたアセスメントにその人の不安や境界の不安定さがより明確に反映される結果となり、バウムテストを用いたアセスメントの重要性が示唆された。また箱庭療法は、箱庭に親和的かどうかは個人によって異なるが、それを媒介として自らの生き方の振り返りや自らの本質の気づき、他者との新しい関係性の構築などが生じる点で､乳がんの心理的援助において有効だと考えられた｡乳がんの心理的援助においては、個々人のニーズを見立てた上で、イメージを用いた心理療法も含め、より多様な心理的援助を検討するとが重要である

研究成果の概要（英文）：This research investigated effectiveness of imagery in psychotherapy for breast cancer as somatization. The results suggested that Baum test was more sensitive and effective to assess patients' anxiety and unstable boundary than questionnaire method.　Sand play therapy was suggested to be effective and significant in that it brought about psychological changes among patients, such as reflection of their life, awareness of their inner essence and building up new relationship with others. In order to consider more suitable psychological support for breast cancer patients, it is important to provide various kinds of psychotherapy, including psychotherapy of imagery, according to assessment of individual needs.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,600,000	480,000	2,080,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	350,875	105,262	456,137
２０１２年度	349,125	104,738	453,863
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：臨床心理学
キーワード：身体化、乳がん、心理療法、イメージ、箱庭

１．研究当初の背景

こころとからだの関連性については古くから議論され、近年身体疾患患者に対する心理的援助が急速な広がりを見せている。身体化には、神経症、心身症、身体疾患という３

つのレベルがあるが、そのような生きる上での苦しみが身体へ症状化される身体化に関する心理臨床学的研究は、事例研究・統計的研究とも相当数行われてきている。しかしその内容を検討すると、不安や抑うつへの二次的援助といった観点が中心であり、身体化の心理療法における箱庭や夢などのイメージを用いた心理療法の有効性について検討したものは少ない。しかしながら、筆者はバセドウ病の心理的援助に関する研究に携わっており(田中他、2005 他)、自らの臨床経験においても、身体化の心理療法においては本格的な心理療法が意義を持つと想定する立場に立つ。本研究では近年増加している慢性身体疾患としての乳がんを取り上げ、乳がんを抱えて生きる人への心理的援助のあり方について検討するため、従来の先行研究では十分扱われていない、イメージを用いた心理療法の有効性について探索的に検討を行うこととする。また乳がんを抱えて生きる人(以下乳がん者とする)の心理的援助といっても、臨床心理学の視座においては、それぞれの人の個別性が重要であり、それゆえより適切な心理的援助を提供するうえではアセスメントが重要となる。よって本研究では、乳がん者の心理的援助のためのアセスメントにおけるバウムテストの意義について検討する。

２．研究の目的

本研究は、（１）身体化としての乳がんのアセスメントにおけるバウムテストの意義、（２）乳がん者の心理的援助において、イメージを用いた心理療法である箱庭療法の有効性について探索的に検討することを目的とする。

３．研究の方法

（１）本調査Ⅰ

調査協力者：乳がん術後の放射線治療中の30代から60代の女性8名(平均53.50歳、SD＝12.02)

方法：調査への協力が得られた医師を通して調査協力者に対して調査への協力を求めた。なお､本研究はA病院倫理委員会の承認を得て行われた。調査内容は、半構造化面接とアレキシサイミア傾向を測定するためのTAS-20（小牧、2003：本尺度については、日本語版を作成した小牧元氏より使用許可をいただいた）、「実のなる木を一本」描くバウムテストを施行した。半構造化面接では、乳がんという病いの体験とそれに伴う変化のプロセス、心理的支えなどの観点を中心とするインタビューガイドを用いた。半構造化面接では、調査協力者の心理的負担に十分配慮し、調査に参加するプロセスが何らかの心理的援助としての意味を持つように留意した。

（２）本調査Ⅱ

調査協力者：本調査Ⅰの調査協力者に対し口頭と紙面にて、箱庭療法の経時的調査である本調査Ⅱについて説明し、協力同意が得られた人。

方法：個々の人の受診のペースに合わせ、箱庭制作を複数回行った。箱庭療法においては、箱庭に向かう主体性が一つの重要な治療要因と考えられるため、実際の心理的援助の状況と限りなく近づけるため、そのセッションで箱庭を行うかどうかは、調査協力者のニーズに合わせ、調査協力者の主体性を尊重するよう留意した。

４．研究成果

（１）文献研究

身体化の心理療法に関する国内外の文献の収集・文献研究を行った。慢性疾患としての乳がんに関する心理的視点からの先行研究は、看護学や精神医学領域の研究が大勢を占め、また研究方法も質問紙法を中心としており、研究方法の問題点があること、心理的援助に関する研究は患者会などの自助グループ、グループアプローチ、心理教育に関す

るものが多く、個別心理療法の研究が少ないことなどが見出された。従来身体疾患患者の心理的特徴を理解するうえで意識レベルを測定する質問紙法では限界があり、投映法を用いて病態水準という観点からアセスメントを行うことの必要性が指摘されているが、質問紙法以外にはロールシャッハテスト、終末期患者のバウムテストの事例報告が散見される程度であった。また乳がん者のアレキシサイミア傾向を示唆する先行研究もあり、言語化された不安・葛藤の有無という次元に着目するだけはなく、投映法を組み合わせたアセスメントを行うことが求められることが明らかになり、本研究の位置づけが明確になった。また文献研究の成果は、表現療法の意味に焦点を当て、自己の強化、自己イメージの側面を適応させる方法として安定性と心理社会的機能を向上させるという Wood ら（2010）などの先行研究を概説し、「乳がんの心理臨床学的援助としての表現療法」という論文にまとめたほか、最新の乳がん者の心理的援助に関する海外文献を 2011 年、2012 年の「精神療法」の海外文献抄録で紹介を行った。

（２）本調査Ⅰの結果

アレキシサイミア傾向を測定する TAS-20 については、最も高得点を示した人でも、32 点であり、0 点の人が 2 名と、従来の研究でアレキシサイミア傾向が指摘されていたものの、乳がん者が必ずしもアレキシサイミア傾向を示すわけではないことが示唆された。また半構造化面接の分析を行った結果、多くの人は再発の不安を抱えながらも、乳がんという病いの体験を前向きに捉えようとしており、家族などの支えや自分の生きがいとなるようなライフワーク（仕事や活動）を継続することで、病によって生じた揺らぎから安定を取り戻そうとしていた。

一方、言語面接で「自分は大丈夫」と気丈に語る人でも、75%で、バウムの幹先端が開放されている、根の部分が開放されている、メビウスの木、一線枝など、境界の弱さ、守りの薄さを感じさせるバウムが描かれており、不安定さがうかがわれた。ただしこれは本来のその人の病態水準を示唆するものという視点だけでなく、同時に、乳がんの術後の放射線治療の最中であるという、強い不安にさらされる状況下の特異性の影響についても慎重に検討することが必要であろう。バウムは、心理療法としてもよく用いられるアセスメントの方法であるが、意識水準を扱う質問紙法や言語化が中心となる面接よりも、投映法であるバウムにおいて、乳がん者の抱える不安やしんどさ、境界の揺らぎがより明確に表現される傾向が示唆されたといえる。このように、乳がんという身体化の心理的援助においては、バウムテストを用いて多面的にアセスメントすることが重要であることが確認された点が本研究の一つの成果だと考えられる。

（３）本調査Ⅱの結果

本研究では、同じ乳がん者であっても、個別性が重要であり、適切な心理的支援のあり方が異なるという想定のもと、箱庭療法の継時的調査に参加するかどうかを調査協力者の主体的な意思決定に委ねた。本調査Ⅰ、Ⅱの結果について、両調査に参加し箱庭を制作した調査協力者(箱庭群)と、本調査Ⅰのみの調査協力者(非箱庭群)とに分け、詳細な事例研究を行った結果、以下の点が示唆された。

① 非箱庭群の結果と考察

箱庭に親和性を示さず本調査Ⅰのみ参加した非箱庭群は、アレキシサイミア傾向の TAS-20 の得点が低かった。TAS-20 が 0 点の 2 名は両者とも非箱庭群であり、感情伝達困難の 2 項目程度に「ややあてはまる」と回答

した人も、口頭で確認するとアレキシサイミア的というよりも、相手との関係性を考え、自分の心におさめることができる自我境界のあり方を示唆するという印象に近かった。

面接では他者（家族、友人、恋人）の支えが大きいこと（心理的支えにとどまらず家事の手伝いなどの身体的・実際的支えも含む）が、「本当にありがたい」といった強い感謝の念とともに語られた。また病の中でも、ライフワーク(仕事や趣味、ボランティア活動)を続け、そこから力を得ており、ライフワークが病いの体験からの日常性の恢復をもたらすうえで重要であることが多く語られた。

またこの非箱庭群の特徴として、病気になったことでの自身の変化が明確に意識化され、言語化されることが多かった。例えば、A さんは、能動的にすべて自分で決定してきた生き方から、病という危機状態の中で夫の支え、家族のきずなを再確認し、新たに他者との関わりの中で生きる方向性を見出すという形で、能動的な受動性という主体のあり方への転換点となったことを語られた。また B さんは、病いを通して、それまでの昼夜を問わず働くあり方から休むことの大切さに気づいたこと、周囲の人の優しさに触れ、一人ではないことを確認したことを語られた。

さらに１回の面接で自発的に生い立ちを語ることも非箱庭群の特徴であった。C さんは、若い頃に母親を亡くした経験など、大きな困難を乗り越えた過去を語られ、その過去の経験を越えて主体的に生きてきたという自信と、その今まで生きてきた中で培ってきた自己信頼感が今回の病いと向き合う体験でも役に立っていることを語られた。

また語り自体がイメージ的で、そのイメージが支えとなる事例もあった。例えば、D さんは、本調査 I で非常に強い不安を感じさせるバウムテストを描かれ、箱庭をせずに複数回面接を希望されたが、2 回目以降主治医のイメージを「お地蔵さん」と語り、主治医の肯定的なイメージが心の支えとして、不安を抱えることができるようになった。このように、箱庭のような直接的にイメージを用いた心理療法を選択しない場合であっても、語りの中でイメージが働き、それが有効な心理的支えと機能していることが示唆されたのは注目に値する。

② 箱庭群の結果と考察

箱庭に親和性を示した箱庭群は、非箱庭群と比べ、TAS-20 の得点が高い傾向と、面接の語りから、一人で何もかも抱えて頑張り、心身の乖離（頭優位でからだの声を無視するあり方）のテーマを抱えてきたことがうかがわれた。また、家族の理解や支えがないと感じていたり、心理的な支えは感じつつも、術後の時間経過に伴い実際的な支えがなくなり、家族の期待と自分の状態のギャップにしんどさを抱えていたりした。また治療のプロセスの中では、ホルモン療法による身体の不調を契機として再発・転移の不安が強まるなど、揺らぎが大きくなり、乳がんの心理的援助では、長期的なスパンでの心理的援助が必要であることが、先行研究同様、本研究においても示唆されていた。

また、箱庭群は、複数回の箱庭制作を通して、面接での語りとは質の異なる語りが展開されることが特徴的であった。無心に砂に触れ、箱庭を制作する体験を通して、同じように無心に遊んだ子ども時代の思い出や、それまでの自分自身の生き方の振り返りが生じたり、今の自分や将来なりたい自分を表現するための媒介として箱庭が意味を持ち、自身の過去、現在、未来をつなぐ心の作業が生じたりした。さらに、箱庭制作を通して、今まで気づかなかった自身の本質を明確に気づき、言語化されるプロセスが生じていた。そ

こで気づかれた自身の本質とは、その人が生きている全体してのからだと頭(意識)の乖離や自己の二面性などであり、それは本格的な心理療法で生じるような、主体のあり方に関わる心理的な気づきであった。

例えば、E さんは、初めての箱庭を制作後、箱庭をともに味わう中で、その箱庭の特徴に言及することから自分語りを始められた。それまでの体の声を無視しどんなにしんどくても頭優先で生きてきた心身の乖離に気づき、自分の中の弱さを認め、自分の生きているからだに「人のように話しかけて」身体の声を聴く作業を始めたことを語られた。

また、箱庭制作を通して、関係性の中で生きるということのテーマと向き合い、他者との関係性をつなぎ直すプロセスも生じていた。F さんは、箱庭に子ども時代のイメージを作り、自らのこころの奥に生きている子ども性の豊かさに気づくとともに、現実の子どもたちとの関わりについての振り返りが生じ、病いの経験を通して子ども達の成長を確認し、新たな関係性への開かれる契機となった。また、箱庭が自分のこれまで忘れていた本質に気づく契機として働き、創作活動が心から好きだった自分に改めて気づき、自分のための時間の必要性を語られた。そして、母として他者のために生きる次元と、人生後半を自分のために生きるという次元の両立が今後の自身のテーマであることを語られた。

このように、乳がん者の心理的援助においては、単なる不安や抑うつに対する二次的援助のみが重要なのではなく、身体疾患という身体化を契機として、主体の変容を含めた、本格的な心理療法的な営みが生じることがうかがわれる。そして、箱庭療法に親和的かどうかは、個人によって異なるが、調査Ⅱの結果が示す通り、箱庭のようなイメージを用いた心理療法を提供することで、自分自身のあり方の内省が生じ、今後の生き方の方向性を主体的に見出したり、イメージレベルだけでなく現実でも他者との関係性をつなぎ直す動きが生じたりしたことは、箱庭というイメージを中心とする心理療法が、乳がん者の心理的援助において有効であることを示唆する結果だと考えられる。

調査Ⅰのバウムの結果で境界の不安定さが示唆されたとおり、乳がんという病いは自己が揺らぐ体験だが、どのような形であれ、自己の全体性を恢復するプロセスが生じることが重要であり、そのプロセスを促進させるものとして、他者やライフワークといった現実での心理的支えだけでなく、箱庭というイメージを用いた心理療法が大きな意義をもつことが示唆された。この他者による支えは、従来の先行研究で多く行われてきた、自助グループやグループアプローチ、心理教育などの心理的援助が該当するだろう。そして、本研究の成果は、そういった従来型の心理的援助だけでなく、箱庭というイメージを用いた心理療法が、イメージに親和性の高い乳がん者にとっては、より有効な心理的援助となりうることを示唆した点だと考えられる。乳がん者の心理的援助では、同じ乳がんといっても、それぞれの人の個別性を大切にし、バウムテストという投映法を用いてアセスメントを行い、長期的な視点から個々のニーズを見立て、従来行われている言語面接やグループだけでなく、必要な人には箱庭をはじめイメージを用いた心理療法をも提供し、多層的に支援を行うことが重要だと考えられる。

今後の課題としては、本研究は事例数が少ない探索的な研究であり、さらに事例数を増やし検討を重ねていくことが挙げられる。また今回は術後の放射線治療中に初回面接を行ったが、術前からアセスメントを行い、長期的な心理的援助を行い、他の心理的援助と

の兼ね合いの中で箱庭療法の位置づけと心理的意味について検討を行うことが必要だと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 桑原晴子、乳がんの心理臨床学的援助としての表現療法、心理・教育臨床の実践研究、査読無、９巻、2010、15－23

〔学会発表〕（計０件）

６．研究組織
(1)研究代表者
桑原　晴子（KUWABARA HARUKO）
岡山大学・大学院教育学研究科・講師
研究者番号：70434769